

皆さんこんにちは。さる4月23日、ここ芸術文化センターのコンサートホールでは、シャガールコンサートと題した珍しい演奏会が行われました。

現在当館で開催中のシャガール展は、教会や劇場、大学など、多くの人々が集まる公共的な空間のために制作された、大規模な作品を紹介するのが中心的なコンセプトなのですが、その中でも特に重要なのがチラシやポスターでも使われている、パリ・オペラ座の天井画なのです。この日のコンサートは天井画に描かれている14の曲目の中から、9曲（アンコールも含めると10曲）をオムニバス形式で演奏するというとても欲張りな企画でした。



▲合唱付きの編成です（撮影：中川幸作）

当然、1,800席もあるホールを使った大がかりなコンサートを、美術館が単独で企画できるわけではなく、全てを取り仕切ってくれたのはこの4月から愛知芸術文化センターの指定管理者となった愛知県文化振興事業団です。劇場の専門スタッフならではの企画力で、今回のコンサートが実現しました。

さて、シャガールの巧みな構成のおかげで、天井画の中では違和感なく収まっているこの曲目ですが、国や時代の異なる作曲家の作品を縦横無尽に駆けめぐるラインナップなので、実は演奏者の方々にとってはかなり負担がかかるそうです。楽器の編成も大分違いますし、気分を入れ替えるのも大変なのでしょうね。これって例えば上野や六本木の美術館を4つも5つもはしごして、全くジャンルの異なる展覧

会を見まくった後のあのポーズとした感じに、少し似ているのではないかと勝手に想像しています（やったことのある方は共感してくれるはず）。

コンサート全体の MC は井上さつきさんが担当されて、曲の合間に解説などをしてくれました。実は恥ずかしながら展覧会担当のワタクシも、シャガール展の宣伝を兼ねて舞台上にちょっとだけ登場して、オペラ座の天井画について簡単なお話をしてきました。美術館で働いていると、ギャラリートークや団体鑑賞のガイドなど、人前で話す機会は結構あるのですが、舞台上でスポットライトを浴びつつ喋るのは、これまた全然違うなと実感した次第です。



▲展覧会を宣伝中（撮影：中川幸作）

流石はプロ、と妙に感心してしまったのはリハーサルで綿密な打合せが行われる事。時間配分がきちり決められているのは序の口、立ち位置に向かって歩き出すタイミングや声の出し方まで細かいチェックをするんです（この打合せが余計な緊張を誘っていた気もしますが・笑）。舞台裏で名フィルの皆さんが思い思いに音出しをしている姿を横目に、気分はすっかり「にわか関係者」です。「イチベル」だの「カゲアナ」だの知る限りの業界用語を駆使して、アイアム関係者アピールをしてみたい誘惑にかられます。

ただ一つ残念だったのは、自分がMCで喋った前半は舞台裏にいて、原稿を頭に入れていたので(ええ、完全アドリブはちょっと無理でした)、演奏を聴く余裕が全くなかったこと。やはり人間、心に余裕がないと芸術を楽しめませんね、と言いつつ長くなってしまったので続きは次回に。

(TI)